

# 第7回 「日本語大賞」

わたし      つか      ことば  
テーマ「私が使いたい言葉」



一般の部   優秀賞   受賞作品

## ゼロの向こう側

石川県

山中 里紗

日本語には「なさすぎる」という言葉がある。「ない」つまり「ゼロ」の向こう側を表す「なさすぎる」。日本人は「なさすぎる」という言葉で、ゼロの向こう側を表現するのである。

物心がついたときから、日本語が大好きで、私にとって日本語の辞書は友達のような存在だった。小学三年生の時、初めて国語辞典を買ってもらった時の、世界一の宝物を手に入れたような感情を今でも覚えている。中学入学と同時に電子辞書をねだり、より多くの日本語の吸収を楽しんだ。日本語を知れば知るほど、自分の感情やありとあらゆる物事について豊かに表現できるようになることが、とにかく好きだった。辞書があれば、全ての日本語を理解できるとさえ思っていた。

しかし私には唯一、理解が及ばず、口にしない日本語があった。

「時間がなさすぎる」、「お金がなさすぎる」、「常識がなさすぎる」。

私には「形容詞『ない』」+「すぎる」の「なさすぎる」という日本語が全く理解できなかった。聞いたたび、読むたび、強い違和感を募らせた。私にとって「なさすぎる」という日本語は誤用と言っても過言ではなかった。

「すぎる」は「状態が度を越えている」と辞書に載っており、日本語として容認されている。しかし、「ない」が「度を越えている」とはどのようなものだろうか。「ない」は「ゼロ」なのである。「ゼロ」には度合いがない。それゆえ、「なさすぎる」という日本語は不自然であるはずなのだ。

しかし、多くの日本人が「なさすぎる」と口にする。「なさすぎる」という日本語は存在する。「ゼロ」には度合いがないにもかかわらず、日本語は「ゼロ」に度合いを見い出そうとする。日本人は「ない」の向こう側に何を表現しようとしているのだろうか。

私以外の日本人がたやすく操るこの日本語が、私には理解できない。理解できないということが理解できてから、私は「なさすぎる」という日本語を口にせず、聞き流すようになった。そうやって、胸にある不自然さに触れないようにすごしてきた。

高校二年生の夏、マーク・ピーターセン著『日本人の英語』という新書に出会った。日本人の英語の問題点を解き明かす本書の中で、著者が「なさすぎる」という日本語に疑問を投げかけていた。

「あの人は思いやりがなさすぎますよ」。その表現を聞いて、日本語としては、何かが「なさすぎる」という言い方が許されていることを初めて知った。「なさすぎる」はどうしても英語にならないので、強いフラストレーションを感じ、そのころの私の国文学の先生のところまで文句を言いに行った。

「『ない』は『何もなし』という意味ではないか。『ゼロ』ではないか。『なさ』には度合いがあるのか。『少なすぎる』というのならわかるが、『なさすぎる』なんて私にはどうしても納得できないことである。英語は決してそんな非論理的な言い方を許さない」というようなことを言ったら、先生は「まあ、英語はよくわからないが、『ない』という日本語は『ゼロ』じゃない」と教えてくれた。

私はこの国文学の先生とやらの言葉に疑問符を浮かべ、著者に賛同した。そして、「なさすぎる」という日本語に疑問を持つのは私だけではないということに自信を覚えて、「なさすぎる」という日本語をついに口にする事なく、私は大人になった。

大好きな祖母が死んだ。日差しに夏を感じるようになった、春の終わりの日だった。

入院していた祖母が危ないと連絡が入り、私は帰宅するため電車で飛び乗った。最寄り駅のホームで、私を迎えに来た母が、祖母の死を口にした。

私は何も思わなかった。涙も出なかった。ありとあらゆる感情がなかった。「悲しい」「苦しい」「なんで」「嘘だ」……。そんな感情が、すっかり抜け落ちていた。そして、何も思わないことや涙が出ないことに対して、不思議だと思ふ感情すらなかった。私はその時、初めて日本語にできない感情に出会った。

祖母が亡くなって最初に感じたのは「冷たい」だった。ベッドに横たわる祖母の手に触れ、感じたことのない温度に、すぐに手を引つ込めた。信じられないほど、冷たかった。小さくて、しわしわで、いつも指輪をしていて、針仕事が得意で、優しく手をつないでくれた、大好きな祖母の手。まるで別物のようだった。

「痛い」「寂しい」「暑い」「いやだ」……。私はぬくもりを失った祖母の手に触れてから、言葉が追いつかないほど、多くの感情に触れた。それはかつてないほどめまぐるしい感情だった。

祖母の死から数日後。その数日の忙しい感情とは対照的な、祖母の死を知った駅のホームでの感情が忘れられなかった。あの名前のない感情は何だったのだろうか。日本語で表現できない感情などないはずなのに。大好きな祖母が亡くなったというのに、感情に名前をつけようとしている自分を嘲笑しなくなった。

生まれた時からずっと同じ家で暮らした祖母。例えば、日本語に興味を持たせてくれたのは祖母であった。小学生の時、国語の宿題だった教科書の音読練習にも何時間も付き合ってくれた。漢字や日本語の意味を教えてくれた。中学生の時、自分では読まないような歴史や哲学に関する本をくれた。本が教えてくれる知らない世界に胸を躍らせ、日本語の表現をより豊かにした。高校生の時、作文コンクールの入賞を自分のことのように喜んでくれた。私が作文を書く事でこんなに喜んでくれる人がいるのだと初めて実感した。大学の時、「日本語の先生になる」と話す私に、くしゃくしゃな笑顔で「頑張つて」と言ってくれた。いつでも日本語に思いを馳せ、日本語を追いかけ続けた私を、祖母はずっと応援してくれていた。

これはそんな祖母が私のために遺してくれた、最後の問題だ。そんな思いを胸に、祖母のいない日々をこの問題に費やした。

言葉にするならば「ない」よりも「ない」。「ゼロ」よりも「ゼロ」。「ない」という感情すらなく、数字で検知できないほど「ゼロ」。「ない」では物足りず、「ゼロ」では表現しきれない。でも確かに「ない」であり「ゼロ」。そんな感情。

私は自然と「なさすぎる」という日本語に落ち着いた。「悲しい」「寂しい」という感情があってもいいはずなのに、「ない」。これが「ない」の度合いか、とあれほど拒んでいた日本語をすんなりと受け入れることができた。いつか読んだ本の国文学の先生が言ったように、確かに日本語の「ない」は「ゼロ」ではなかった。

祖母の死は、私に「なさすぎる」という初めての感情を遺していった。「ない」よりも「ない」感情。「ゼロの向こう側」という、存在が曖昧であるにもかかわらず確実に存在する感情。それが「なさすぎる」。「ゼロの向こう側」という未知の領域を侵してまで、自分の感情を表現したいという、日本人の日本語への尽きることが「なさすぎる」貪欲さの表れなのだろう。

日本語に限らず、言葉とは使わなければ意味がない、と日本語教師の私は教壇でよく話す。どれだけ多くの調理器具を持っていても、使わなければ意味がなく、料理も上達しない。同様に、どれだけ多くの言葉を知っていても、使わなければ意味がなく、日本語が上達しない。いつもは留学生に向かってこの言葉が、今は私に突き刺さる。私もやっと理解できたこの日本語を使いたい。祖母が最後にくれたこの日本語を使いたい。

教壇に立つ忙しい日々を楽しみながら「時間がなさすぎる」と冗談交じりに行ってみたい。「お金がなさすぎる」と友人との買い物で見栄を張った次の日に、涙目になりながら言ってみたい。新聞を読みながら「最近の子は常識がなさすぎる」と、自分が「最近の子」ではなくなったことに、自嘲を込めて言ってみたい。

これからも私は、知らない日本語と出会い使って日本語を豊かにしていく。そしていつか、祖母に向かって自慢げに言うのである。

「私には知らない日本語がなさすぎる」と。

#### 参考文献

マーク・ピーターセン (1988) 『日本人の英語』 岩波書店 (岩波新書)